

2002年10月6日

姦淫してはならない

[聖書]申命記5章18節 姦淫してはならない。

マタイ福音書5章27～30節 「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」

マタイ福音書19章3～9節 ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」すると、彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」

[序]男と女に創造された

神さまは男性でしょうか。女性でしょうか。日本の国で第一の神は、天照大神(アマテラスオホミカミ)、女神です。伊勢神宮の内宮に祀られています。でも聖書では、イエス・キリストが神さまを「天の父」とお呼びになりました。聖書では伝統的に神を「He」で表わしています。では神さまは男性なのでしょうか。

聖書のはじめに天地創造が記されていますが、「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(創世記1:27)とあります。神さまは人間を、ご自分にかたどって、ある者を男、ある者を女として創造されたのでした。すなわち女性も神さまをかたどって創造されているのです。すると神さまは男でもあり、女でもあるということになります。これはどういう意味なのでしょう。

「神にかたどって」とは、男とか女という性別が問題にされているのではなくて、神の本質「愛」にかたどって創造されたということです。神さまは人間をご自分に似せて愛に生きる者としてお造りくださったという真理が示されているのです。愛に生きる者として造られていながら、では私たちは実際にどのように生きているのでしょうか。

今日は十戒の第七、「姦淫してはならない」です。姦淫とは、夫婦のどちらかが配偶者以外の人と体の交わりを持ち、夫婦の関係を壊してしまうことです。私たちの愛が、大事な人間関係を傷つけ、破壊する現実に対する厳しい戒めです。

[1]結婚:一体になっていく営み

イエス・キリストは「離婚は律法に適っていますか」という質問にこうお答えになりました。「創造主は初めから人を男と女とお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」(マタイ19:4~6)。結婚とは、愛に生きる者として神にかたどって造られた男と女が、一体になっていく営みだと言われています。

十戒の第一の戒めは「あなたは、わたしをおいてほかに神があってはならない」でした。神さまの真正面に我が身を置いて、真剣に神さまに向かう時には、神さまと私の間に他の何物も入る余地はありません。もしも神さまを二人・三人持つことが出来るとすれば、唯お一人の神さまと本当に一体となることを求めているからにはほかなりません。神さまと一体にならずに、どうして神さまの真実の命を受けることが出来ましょうか。

それと同じに、夫婦も一体になっていくのですから、夫と妻との間に何者も入る余地はありません。二人の間に何者かが入る余地があるならば、一体とはいえません。ところがこの夫婦の一体性は、結婚するとたちどころに出来上がるものではないのです。イエス・キリストは「父母を離れて、結ばれて、一体となる」とおっしゃいましたが、注目すべきことには、「離れる」「結ばれる」「一体となる」の動詞が三つとも未来形なのです。日本語訳ではそれがはっきり出ていなくて残念ですが、英語訳では shall (King James Version), will (New International Version) がちゃんと使われています。時間をかけて夫婦が一体となっていくのですね。

「父母を離れる」とは「親離れする」ことです。何かあれば親に助けを求めようとする甘えがある間は、二人は夫婦として深く結ばれて一体となることは出来ません。「親離れ」は良い夫婦になっていく大前提です。ところがそれは、結婚式を挙げて届出をして戸籍を作ったとか、親の家を出て自分たちの住居を持ったということで、自動的に実現するものではありません。いろいろな事にぶつかりながら、時間をかけて自覚的に実現させていくものなのです。

「結ばれる」も同じです。結婚式を挙げた・一緒に暮らすようになったということで、自動的に結ばれた状態になるわけではありません。夫と妻との人格的な結合は、お互いに相手の語る言葉に耳を傾け、心を込めて聴くことによって、次第に深められていくのです。

本気で聴くと、相手の気持がよく分かってきます。そしたら応答しなければなりません。私たちは今自分の伴侶が心から求めていることを知っているのでしょうか。知っているなら、それに応答しなければ、受けとめたことになりません。相手の求めている通りに応えられないのなら、そのことをちゃんと伝えるべきです。そこに夫婦の対話が生まれます。そして結びつきが深まっていくのです。

男の関心はとかく経済や物質面にのみ傾いて、心の面をなおざりにしがちです。そして仕事や付き合いに没頭して、妻との対話をおろそかにし、一体性を深めようとしないままで、定

年を迎える人が多いようです。新聞の調査によると「二人だけになる老後の生活に楽しい期待を抱いている妻は一割しかいない」とありました。

あくせく働いて、さあこれからゆっくり老後を楽しもうとした時に、妻の心はすっかり冷え切って遠く離れてしまっていたとは、何という悲劇でしょうか。「あの人が私と心を向き合わせようとしてくれるなんて、そんなことは起こり得ない」という妻たちの叫びに、もっと早いうちに気づくべきです。そして一体となっていく結びつきを日々大事にしていかなければなりません。

このように夫婦が一体になっていこうとする二人の大切な結婚生活を、姦淫が破壊してしまうのです。

[2]姦淫の罪の恐ろしさ

イエス・キリストはおっしゃいました。「あなた方も聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見るものはだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(マタイ5:27~28)。口語訳・新改訳では「だれでも情欲を抱いて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである」と訳されていました。

たしかに「女」と訳されていた言葉は「妻」という意味も持っています。でも「女」と「妻」とでは受けとる側の気持に違いがあるのではないのでしょうか。「女」だと、どんな女の人を見てもということになりますが、「他人の妻」と訳されると、他の人の奥さんとか、亭主に気を付けさえすればいいのかなと思ったりしないでもありません。もしもどんな女性を見ても男は変な気持になってはならないというのでは、やはりイスラームの世界のように、女性みんなに黒いベールをすっぽり被って貰わなければなりません。

片倉もとこ著「イスラームの日常世界」(岩波新書)を読みました。アラビアの女性社会に入り込んで調査研究した方です。「ムスリムは自分たち人間が弱い者であることをいさぎよく認める。したがって誘惑に負けやすくなるような状況をつくらないことにする。不特定多数の男女が肌をみせて接触していると、乱れるにきまっているから、男も女も手首・足首までの長い衣服をつける。性的誘惑に対して男はとくに弱いから、女はベールをつけて弱き男性をまどわさないように協力する。弱い人間に酒をのませると何をしでかすかわからないから、禁酒にしておけば社会の秩序は保たれ、個人も平安であると考え」とありました。

このような言葉を読むと、イスラームの世界は私たちが暮らしている社会よりもはるかに良い世界のように思われてきます。私達の日常世界では男は酒なしでは過せない。どうして酒をそんなに飲まなければならないのでしょうか。ムスリムの男たちは酒なしでも豊かな会話を楽しむそうです。一方女性はこれでもかこれでもかと露骨なセクシャル・アピールを競います。どうしてそんなにまでして男心をそそろうとするのでしょうか。

レビ記18章に「いとうべき性関係」についての戒めが記されています。実に色々な男と女の性関係があるのですね。とても説教の中で語れません。皆さんがめいめいで是非お読みく

ださい。これらの「いとうべき性関係」が、イスラエルの民がそこから脱出して来たエジプトでも、これから移り住むカナンでも風習として行なわれている。すなわちこの世界いたるところで行なわれている。しかしあなたたちはこれらの風習になじんで、身を汚してはならないと強く戒められているのです(レビ記18:24)。

さらに神さまは、これらの乱れた性行為(18:25)によって土地が汚されたので、その土地がそこに住む者を吐き出したとおっしゃっています。私は神さまがイスラエルの民をエジプトからカナンに移された結果、カナンの先住民が追い払われたり圧迫されたことに割り切れない思いを抱いてきました。そしてそれが今日のパレスチナ紛争の原因になっています。

しかし旧約聖書の信仰からいえば、先住民たちの乱れた風習の結果、土地が汚され、汚された土地によって彼ら自身が吐き出されてしまったのだと言われています。性の乱れは、本人の人格が汚れて卑しくなるだけでなく、住む土地まで汚れて住民がそこで暮らせなくなってしまうほど恐ろしい結果を生むと考えられたのです。だからイエス・キリストも「もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである」とおっしゃったのでした。

さらに旧約聖書では、ただお一人のまことの神さま以外に神々を求めることを「姦淫」といっています。「するとこの民は直ちに、入っていく土地で、その中の外国の神々を求めて姦淫を行い、わたしを捨てて、わたしが民と結んだ契約を破るであろう。その日、この民に対してわたしの怒りは燃え、わたしは彼らを捨て、わたしの顔を隠す」(申命記31:16~17)。

このように姦淫は夫婦の一体性を破壊するだけでなく、人間と土地すなわち自然との調和も、さらには神さまとの真実な交わりさえも破壊する重大な罪と考えられているのです。日本の文化では、単なる浮気と軽く扱ったり、美しいロマンスとして憧れたりされていますが、私たちはもっと姦淫を恐れなければいけないのではないのでしょうか。地獄に投げ込まれることに、身震いしなければならぬのではないのでしょうか。とにかくカナンの住民の性の乱れが神さまの怒りにあい、土地がユダヤ人に与えられ、それが原因で 3400 年経った今日でも、ユダヤ人とパレスチナ人との殺し合いが続いているのですから。

[3]イエス・キリストの前に立つ

貧しい女性たちが売春婦になって生きています。世界中いたる所にそのような女性が大勢います。ということはそのような女性をお金で買って性欲を満たそうとする男どもが大勢いるということです。何も貧しさからだけではありません。つい先日もイギリスの前の首相の愛人関係が暴露されていました。豊かな人たちの間でも、姦淫は広がっているのです。

確かに私たちの食欲と性欲はすごい力で私たちを突き動かします。神さまはそのような欲望を持つ体をお与えになりました。しかしそのような本能のおもむくままに生きるのでは他の動物と変わりありません。私たちは欲望をきちんとコントロールして道徳的に秩序ある社会をつくることが出来るように造られたはずですが、でも現実にはそれが出来ない。

イスラームの世界のように酒を禁止し、女性にはみなヴェールを被ってもらえばそれで姦淫の罪を克服できるのでしょうか。ここで私たちはもう一度イエス・キリストの前に立つ必要があります。

律法を守ることに熱心な人たちが、主イエスのところに姦通の現場で捕らえられた女を連れてきました。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」(ヨハネ8:5)。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」。すると年長者から始まって一人また一人と立ち去って皆いなくなっていました。「だれもあなたを罪に定めなかったのか」(ヨハネ8:10)。

この女性を処刑する資格のあるものが、律法に一番熱心な人々の間にも一人も居ませんでした。私がお場に居たとして、石を取らずに立ち去ったとしたら、自分も罪を犯した者であることを言い表したことになります。「何だ。牧師のくせに」と責められ、面目丸つぶれです。だから嘘ついても、自分の名誉を守らなければなりません。

ところがイエス・キリストの前からは、厳格な人たちが皆立ち去ってしまいました。しかも「年長者から始まって」とあります。長老として尊敬されている人が正直に自分もこの女性と同じですと告白したことになります。偉いな一と思えます。イエス・キリストの前に立つと、自分の罪深さを率直に認めざるを得なくなるのですね。

その女性はイエス・キリストと二人だけになってしまいました。「わたしもあなたを罪に定めません。これからは、もう罪を犯してはならない」。イエス・キリストの口から出てきた言葉は赦しでした。どのような事情から姦通の罪を犯すようになったのでしょうか。律法では石で打ち殺されるとされています。でも神さまはイエス・キリストを通して「赦す」とおっしゃるのです。

貧しさのために売春婦になって生きている女性が大勢いる世の中です。男も女も性欲に突き動かされて罪を犯します。一体になっていく夫婦が満たされぬ思いの中で愛を他に求めて罪を犯します。相手が自分の思い通りにならないからという手前勝手な理由で離婚してしまいます。イエスさまはそのようなケースでの再婚は姦通の罪を犯すことになるかと警告なさいました。神さまの目からご覧になると、いとうべき性関係の風習が世界のいたるところで行なわれています。

神さまは私たち人間を、神さまの愛のお姿に似ている者としてお造りくださいました。しかし私たちは性をめぐる罪で非常に汚染されている社会を作ってしまった。誰もが性的罪で人を非難できない者になってしまいました。我が身を汚して、神さまが備えてくださった祝福を頂けなくなってしまいました。自然環境との調和した生活すら破壊する結果になりました。

そこで神さまは神の子イエス・キリストをこの世に送り、私たちの罪の汚れを十字架の血で

洗い清め、神の子として真実に愛し合いながら生きていく祝福へと私たちを招き入れようとして下さったのです。律法を与えられていても守りきれない弱さを持つ私たちを、赦し清め、「もう罪を犯してはならない」とのお言葉をもってやり直すチャンスを与えてくださいました。

子どもが大人になるまでに、いったい幾度叱られるでしょうか。叱られながら叱られながら親の愛に包まれて、子どもは一人前に成長していきます。「もう罪を犯してはならない」というイエス・キリストの言葉こそ、まさに私たちを罪から清め、神の子らしく愛し合って生きる者に育ててくださる救い主の言葉です。

[結] 清い愛をもって協力しつ

創世記の初めに、二つの天地創造の話が記されています。第一の話では、神が順序だてて天地万物を創造し、最後にご自分にかたどって人を男と女に造り、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」とお命じになりました。第二の話では、よい食べ物・金や宝石を豊かに産する園を作り、そこに住み・耕し・守る務めを男にお与えになりました。そしてその任務を果たしていく相応しいパートナーとして一体となるべき妻をお与えになりました。

どちらにも共通する信仰は、神さまがお造りになった素晴らしい世界をずーっと守っていく大切な仕事を、男と女あるいは妻と夫が協力して果たしていくことが、神さまのご期待だということです。

神さまは一切汚れのない清いお方です。神さまの愛は清い愛です。ですから私たちが神さまから授かった任務を果たしていくにあたって、清い愛をもって協力していかなければなりません。私たちの性生活が汚れると、世界が崩れてしまう——それほど重大なことなのです。だから「殺してはならない」の次に「姦淫してはならない」という戒めが与えられたのでした。

9月15日の日曜日を韓国のソウルで過しました。午後まで剣道の講習会がありましたので、夜の礼拝に連れて行ってもらいました。6時半に着きましたら8時の礼拝まで、秋祭りに当たる行事が行なわれていました。1000人位の会堂が満員で、教会の小学生・中高生・青年・婦人会がそれぞれダンスや劇などを演じていました。印象的だったのは、30代・40代の婦人たちの踊りが非常に魅力的だったことです。女性の美しさは小さな子どもから年令の移り変わりと共にどんどん変わっていきます。そして結婚した婦人たちも純白の衣装で踊るのですが、何ともいえない色香をただよわせていました。

私は今回、イエス・キリストが「みだらな思いで他人の妻を見る者は」とおっしゃった言葉を読みながら、すぐソウルの教会のダンスを思い浮かべました。女性の美しさは年と共に豊かになっていくのですね。ダビデ王が家来の妻バテシバの魅力のとりこになって、横取りして大きな罪を犯してしまったのも、無理からぬ面があります。だからこそ女性も十分に自覚しなければいけないのではないのでしょうか。

神さまは男と女それぞれの性に美しさや魅力をお与えになりました。それらを大切にしな

がら、愛において清い生活を創っていかなければなりません。キリストの前に立つことによって、人前を取り繕うことはできても、神さまにはごまかせない自分の罪深さを自覚して、赦しのお言葉を聞きつつ、罪を犯さない生活をうち立ていきましょう。神さまとの真実な交わりを土台にして、夫と妻とが深く一つに結ばれていく愛を築いていきましょう。 完